

連携先世界遺産：真言宗御室派総本山仁和寺

仁和寺の魅力・価値がグローバル・ローカルに高まり、新たな「ご縁」を生み出せる企画を実施する可能性を探る

■ 受講生

氏名（50音順）で記載してください。

大槻 悠子（京都女子大学 現代社会学部3回生）

堀木 翔太（立命館大学 産業社会学部2回生）

松岡 知里（立命館大学 産業社会学部1回生）

長谷川 美桜（立命館大学 文学部2回生）

川口 未来（立命館大学 文学部2回生）

松井 貴大（立命館大学 産業社会学部4回生）

溝口 一成（立命館大学 政策科学部2回生）

和田 智仁（立命館大学 経済学部3回生）

■ 担当教員

桜井 政成（立命館大学政策科学部教授） / 山田 大地（立命館大学非常勤講師）

活動目的・概要

本授業の目的は、地域活性化の一手法である「Asset-Based Community Development（アセット・ベースド・コミュニティ・ディベロップメント）（ABCD）」を活用し、仁和寺の魅力・価値がグローバル・ローカルに高まり、新たな「ご縁」を生み出せる企画を実施する可能性を探ることです。「ABCD」とは、地域に存在する資源をもとに地域を活性化し発展させることで、ここでの「資源」とは、その地域に存在する文化財や自然・景観などはもちろんのこと、その地域に存在する学校や病院や企業、また多様な地域住民や住民間のつながりなど、あらゆるもの地域活性・発展のためのものを「資源」ととらえます。授業を通じて、学生は世界遺産の地域的価値を理解し、コミュニティ・ディベロップメントの基本的な方法を理解していきます。

授業では、学生が1,100年以上の歴史を持つ仁和寺の「強み」を理解し、また、周辺に存在する学校や宿泊施設、店舗、交通機関等の地域資源を理解することで、新たな企画の提案を考えていきます。さらには、そのアイデアに基づいた試験的な取り組みを実現することも目指していきます。



◆ 主な活動（授業や自主活動も含め、自由に記載してください。必要に応じてフォントサイズ等も調整してください。）

2018. 5. 20 全体オリエンテーション

2018. 8. 3 @仁和寺

関係者からのオリエンテーション、ABCDアプローチの理解（レクチャー）、今後の調査計画の立案

2018. 8. 31～9. 2@仁和寺

①インタビュー調査（寺社関係者、観光客、周辺飲食店、地域住民、まちづくり協議会）

②調査のまとめ

2018. 8. 14 企画書の発表@仁和寺

2018. 11. 3 企画「秋祭りin仁和寺」の実施

2018. 12. 9 世界遺産関係者と振り返り、成果物発表



活動の成果

①地域の方と観光客で学生パフォーマンスと御室音頭を楽しもう(長谷川美桜・川口未来・松岡知里)

<企画の背景・主旨>

参拝者、地域の方へのヒアリングを通して、地域の方々には身近な世界遺産である仁和寺を地域の象徴と認識しているが、実際に訪れることは少ない傾向にあることがわかった。また、仁和寺の方は主に若者を中心とした多くの地域の方に仁和寺を訪れてほしいと考えていることもわかった。そこで、地域の方に学生団体のパフォーマンスや地域の有志の方々がつくられた「御室音頭」（御室学区の名所を歌詞に盛り込んだ音頭）を踊り楽しんでいただく企画を実施することで、地域の方に仁和寺にさらなる親しみを持ってもらうだけでなく、学生にも仁和寺に親んでもらいたい。

<企画の内容・成果>

立命館大学アカペラサークル「clef」と「御室音頭を広める会」に勅使門前でパフォーマンスをしていただいた。被災地、災害地に祈りを捧げるとともに、参拝者に秋の仁和寺の空間で音楽を楽しんでもらえるよう、また、学生団体や地域の方々にも協力していただき企画ステージを盛り上げ、地域交流も兼ねた楽しいイベントにすることを目的に活動しました。普段仁和寺を訪れない学生にもイベントを通して魅力に気づいてもらい、多くの参拝者からステージ企画に興味を持ってもらうことができました。

②仁和寺の意匠、歴史を再発見しよう(和田智仁、堀木翔太)

<企画の背景・主旨>

仁和寺には知られていないさまざまな意匠があり、それぞれに意味があることがわかった。そこで、仁和寺を普通に参拝しているだけでは気づくことのできない細かな意匠についての由来、逸話にふれるパンフレットを作成することで、こうした由来・逸話を仁和寺を訪れる様々な方にも知ってもらい、仁和寺の新たな魅力を発見し、更なる親しみを持ってもらうこととした。また、外国人観光客が訪れた際に仁和寺の宗教、歴史について興味を持っている人が多いこともわかった。他方、英語で書かれた仁和寺のマップは現在あるが、歴史が書かれたものはないこともわかった。そこで、わかりやすく、外国人観光客にも興味を持てる英語パンフレットともすることで、仁和寺について海外の方にも理解してもらうこととした。

<企画の内容・成果>

外国人を含む参拝者のために、普段気づけない仁和寺の価値を発見して欲しいという思いから、仁和寺の魅力伝え、受け取ってから手元に残すことで仁和寺をより身近に感じられることを心がけパンフレットを作成しました。受付に配架させていただくと同時に、企画当日にも参拝者の方に配布し記念にご朱印を押印しました。意匠やお寺と神社の微妙な違いをその場で詳しく知ることができ役に立ったと言ってくくださる方が多数いました。

③親子企画「お守りかゝ出来るまで」「秋の仁和寺を、抹茶を頂きながら楽しもう」(大槻悠子、溝口一成)

<企画の背景・主旨>

仁和寺のよさとして、私たちは仏教の歴史を感じ、またヒアリングから広い空間でゆったりと流れる時間と答える方の声にふれた。そこで、お守りがどのような過程を経て作られているのかを親子で体験することで、親子ともに仏教へ関心を持ってもらい、そして仏教を身近に感じてもらう機会をつくる企画を立案した。そして、仁和寺のゆったりとした空間を活かし、私たちが日頃身を置いている慌ただしく流れる社会を忘れ、仁和寺特有のゆったりとした時間の流れを、境内の紅葉を眺めながらお抹茶を飲みながら感じていただきたい、との主旨のもと、茶所でお抹茶をふるまう企画を立案した。

<企画の内容・成果>

当日は茶所にてお抹茶をたて、休憩する参拝者の方々にふるまった。仁和寺「秋の特別拝観」があったこともあり、多くの拝観者の方が訪れ、お抹茶体験も想定以上の方に楽しんでいただくことができた。残念ながらお守りづくり体験は事前の予約者がいなかったため、当日はお抹茶体験に専念することとした。お抹茶は1杯500円で振る舞い、約50杯を提供することができた。集まった収益は台風で被災した仁和寺の修復へ募金することとした。

活動を振り返って

(本年度はまだ授業が終わっていないため、過年度の学生の声を代わりに掲載致します)

「企画立案してから実行するまでのプロセスは、想像以上のハードルの高さに苦しんだ点も否めないが、意欲的に取り組むことができ、個人的には、悔いもあったが満足している。間違いなく、今回の企画は仁和寺の方と地域の方の協力なしには起こりえないものであり、感謝感激している。」

「本講義を通して私は、「自身の学科で学ぶ考えが全てな訳ではない。これからの時代、もっと柔軟な発想が必要なのでは。」と気付くことができた。この経験はきっと将来役立つと信じている。」

「地域の子供たちには新たな発見を促し、観光に来た子供たちには、仁和寺の魅力を知ってもらうことができたと考えられる。」

「今回のイベントは小規模のように思えたが、(中略)話題性に富んだ企画だったと思う。問題意識を持ち企画立案し実行までしたのは政策科学部に入って初めてのことでありとても新鮮だった。仁和寺さんもこれが今後の参考になれば嬉しいし、私もこの経験を生かしこれからの政策科学部での研究につなげていけるなどと思った。」

担当教員からのコメント

桜井 政成

本年度も、大学は偏ってしまいましたが、学部・回生はばらけたので、多様な学生が集う授業になりました。調査し、企画を立てるにあたっては授業外のミーティングが複数回必要でしたが、キャンパスも異なることもあり、全体で集まることは不可能でした。そこでLINEを活用し、全体や企画のグループごとに連絡を取り合っ、イベント当日に至りました。毎年SNSは利用していますが、本年度は比較的活発なやりとりをオンラインで行い、活用できたのではないかと考えています。これまで4年間行ってくる中で、仁和寺関係者、地域の方々におかれましては、学生の学びへの理解を賜り、助けられてきて現在にいたっております。築き上げてきた信頼感を損ねることなく、学生ならではのフレッシュな視点を活かし今後も何らかの企画を実施していきたいと考えております。

山田 大地

今年度もA B C Dアプローチを手法とし、仁和寺様や御室学区の歴史的・地域的な素晴らしさを「どのような方々に」「どのような手段で」伝えるか、をテーマに調査・企画立案・実践を行いました。住民の方々、参拝者の方々、そして仁和寺にお勤めされる方々の声をヒアリングして見いだされた価値である「広さや落ち着いた空間」「歴史的な意匠の意味」「仏教の持つ教え」を訪れた方々に伝える企画が小さいながらもできたのではないかと考えています。企画実行に至るまでには、仁和寺様・地域の皆様に多大なご協力をいただき、学生を指導いただきました。その結果一部の企画では取り組みの収益を仁和寺様の保全のために寄付することもできました。学生には、仁和寺が「世界遺産だから」価値があるのではなく、仁和寺に係る方々の連綿たる営為で仁和寺が受け継がれ守られてきたゆえに後世に残すべき今日の遺産となったことが伝わったのではないかと思います。

